

はじめに

航空便の接続が向上し、新たなコミュニケーション技術が発達したことで、「距離」というものの捉え方は急速に変化した。距離を埋めるのにかかる時間は短くなり、その方法もさまざまになった。とはいえ、フィンランドと日本には、それでも地理的には大きな隔りがある。日本の大衆文化がフィンランドの若者間で流行したり、フィンランドデザインが日本で人気を博したり、両国を行き来する旅行者の数が増えたりといった現象には、今日の技術的発展が少なからず寄与している。しかしながら、そういった技術的側面だけでは、両国の間に育まれた緊密な政治的関係や、フィンランド人と日本人の間にあるといわれている共通点を説明することはできない。

本書は、フィン日外交関係樹立 100 周年を記念して編纂されたものである。しかし、100 周年を迎える 2019 年に向けたこの共同プロジェクトは、政治的関係を論じるためだけのものではない。我々の目的はむしろ、フィンランドと日本を結ぶ事象や人びとを、さまざまな側面から紹介することにある。本書の出発点となったのは、2016 年 9 月、オウル大学と北海道大学ヨーロッパオフィスが共催したシンポジウム “Interaction, Influence & Entanglement: 100 Years of Finnish-Japanese Relations and Beyond” である。同シンポジウムで集中的に取り扱われたテーマを基盤とし、本書は両国の間の相互作用や影響、関わり合いやつながりといったことを中心に議論している。本書とこのシンポジウムはいずれも、両国の歴史や、両者の間によく見られる状況、未来への展望に着目した長期的考察を共通して扱っている。

本書の背景や目的は、グローバリゼーション、国同士の相互依存関係、国際的・トランスナショナルな事象群の間に見られる関係、または文化同士の邂逅といったテーマと結び付いている。フィンランドと日本、フィンランド人と日本人、またフィンランド文化と日本文化は、そういった広範囲にわたる事象を検証するケーススタディを行う上で、豊富な研究材料となる。同時に本書は、フィンランドと日本、さらに両者を結ぶ現象や人びとを、非常に具体的かつ分かりやす

い視点で考察する。

本書執筆の初期段階から一貫して、筆者たちの目的は、最新の情報を分かりやすい形で提供すること、つまり、誰にでも読め、複雑な事象を読み解くために必要な知識を提供する本を作ることだった。出版言語にフィンランド語と日本語を選んだことも、この目的のためである。昨今の学術書は英語での出版を好む傾向があるが、我々はそれぞれの母国語両方で本書を出版することを希望した。

本を作ることは、常に多くの選択を伴う。本書の場合、最も重要かつ難しかったのは、参加する執筆者と扱う題材を選ぶことだった。むろん、フィン日関係に関わるすべての研究を本書で網羅することはできない。本来論じられるべき数々の興味深い事象（フィンランドでの日本食人気、日本でのネウボラに関する広い関心、交換留学や研究者の行き来の活発化、フィンランドと日本の人びとをつなぐソーシャルメディア、スポーツ・運動に関する共同の取り組み）、関係する組織（交流協会や文化協会、商工会議所や各企業）、またフィンランドと日本の関係に個人的に貢献した人びとすべてについては、本書では詳しく紹介しきれないことは断っておかねばならない。上述のテーマの中には、単に研究している者がいないため取り扱えなかったものもある。

本書は、一般的な年代順構成になっておらず、すべての年または年代に等しく紙面を割いているわけでもない。しかしながら、各章が多様なテーマを論じており、各時代における重要な事象・活動を幅広く説明する内容となっている。

フィンランドにおける日本史研究の先駆けであるオラヴィ・K・フェルトによる序章では、フィンランド人と日本人の最初の出会いが描かれている。アダム・ラクスマンの日本遠征から日フィン国交樹立までの100年以上にわたる期間には、アドルフ・エリク・ノルデンショルドが北東航路の開拓後に日本に滞在したり（1879年）、フィンランドが日本で宣教活動を始めたり、フィンランド語で初めて日本に関する書籍が出版されたりしたが、今回は詳しくは論じられていない。その代わり、稲葉千晴による第1章では、フィンランドの独立が1919年春に承認されるまでの展開や、初期のフィン日外交関係が論じられている。続くパウリ・ヘイッキラによる第2章では、その後の歴史に焦点を当て、外交関係の発展や、第二次世界大戦中の危機について解説し、読者を戦後の時代へと導いていく。

1936年の在ヘルシンキ日本公使館の開設、1944年9月のフィン日国交断絶、1952年8月の総領事館の開設、そして1957年3月のフィン日国交正常化決定（日ソ国交正常化から数か月後のこと）といった出来事は、フィン日関係がいかに関国際政治情勢によって影響されてきたかを物語っている。しかし、こういった出来事からだけでは、戦後のフィン日関係発展の全体像をつかむことはできない。例えば、在ヘルシンキ日本公使館が1962年に大使館へと格上げされたというような出来事は、取りも直さず正史として記録されるが、それと同時期の1960年代初頭に、日本の自動車産業がヨーロッパの実験市場としてフィンランドを選んだという出来事について、深く分析できるようになるには2010年代まで待たなくてはならない。

ラウラ・イパッティによる第3章では、フィンランドの広報外交の角度からフィン日関係を論じている。この研究では、1960～70年代のイメージ政策から、2000～10年代の国家ブランディングに至るまで、幅広い観点からフィンランドと日本の関係を解説している。この長期間を対象とする考察では、1990年代に起こった国家間の枠組みの変化についても触れられている。フィン日関係については、今日ではEUと日本の関係から検証することもできる。そういった観点から、パート・ガンズの第4章では、大きな期待をかけられていたEU日関係が、期待どおりには発展しなかった理由を明らかにする。さらにエルヤ・ケットウネンの第5章では、自由貿易と企業立地の観点から、フィン日関係を国際的な文脈で分析する。フィンランドと日本の商業・経済関係を広く研究してきたユハ・サヒによる第6章では、2国間の直接投資に焦点を当てる。

ユハ・サウナワラによる第7章、島本マヤ子による第8章では、異なる政策やモデルがフィンランドと日本の間で移転した事例を解説する。第7章で扱っているのは地域開発モデルだが、フィンランドと日本の大学間の協力関係についても触れている。一方第8章は、日本でも広く知られているフィンランドのオンカロ核廃棄物処理場について論じられている。

本書の第2部は、政治・経済分野から焦点を移し、文化や芸術、言語、教育に関する事象や人びとを取り扱う。ミカ・メルヴィオによる第9章、カイサ・プロネル - バウエルによる第10章で論じられるのは、視覚芸術や建築、美的価値観、芸術と社会の関係性である。両章ともフィンランドと日本の比較研究を行っ

ているが、同時に、さまざまな国籍を持つ人びとが互いにどういった影響を与え合ったかという点にも光を当てる。

リトバ・ラルバの第11章、小川誉子美の第12章では、地理的に遠く離れた国同士の間関係を発展させた人びとの貢献について語られている。それぞれの章で、マルタ・ケラヴオリとその日本の友人について異なる視点から語られる一方、各章とも外国の言語、文化、歴史が草の根レベルでどのように他国に紹介され、理解されていったかというプロセスを描いている。チェン・イン・シェンの第13章、ナインドルフ会田真理矢の第14章の核心をなすのは音楽、ダンス、楽器演奏に関する体験である。日本とフィンランドのつながりを考えるにあたって、タンゴやカンテレといったものは、真っ先に思い浮かぶものではないかもしれないが、異文化同士の適応性や統合性を検証する上で優れた媒体となる。セイヤ・ヤラギンの第15章では、日本におけるフィンランド人宣教師の活動や、キリスト教幼稚園について取り上げられている。

リーサー・マリア・リヒトによる第16章、リーッカ・ランシサルミによる第17章では、言語の持つ役割、多言語使用の活発化、言語によって生じるつながりや疎外、言語を通じた自己理解の構築といった事柄が論じられている。フィンランド語も日本語も、外国語としては習得が難しいものと考えられているが、グローバル化や国際化の進展、移動手段の向上によって、こういった言語を使い始める人びとが新たに現れ始めている。

言語習得のトピックは、次世代の若者の教育に関する問題にも結び付いていく。国際学力調査(PISA)の結果が良好だったフィンランドは、2000年代においてその教育システムが日本でも広く関心を集め、フィンランド式の教員養成法は日本でもよく話題に上っている。植松希世子・永田忠道による第18章では、このテーマに関して、両国における現在・未来の教師育成、またグローバル教育を実践する手段について論じている。さらに本書の最後では、フィン日関係が将来どのように発展していくかを予測している。2016～18年まで在任するユッカ・シウコサー元駐日フィンランド大使と、日本フィンランド協会理事長の早川治子氏は、両国の間にある課題、可能性、将来の趨勢を予測するにうってつけの人物である。

編者として、本書の企画に協力・貢献して下さったさまざまな国の研究者に

お礼を申し上げたい。同時に、本書を出版する上で不可欠であった方たちの貢献についても述べておかねばならない。まず、本書の重要性を信じて多大なご支援をいただいた各出版社、大学教育出版と Edita 社にお礼を申し上げる。また本書の出版にあたり経済的支援をいただいた北海道大学、一般社団法人日本フィンランド協会理事長の早川治子氏、スカンジナビア・ニッポン ササカワ財団にも謝意を表す。2 言語で出版するにあたり多くの翻訳作業を要したが、編者からすべての翻訳者にお礼を申し上げる（株式会社イーシープロ：序章、第 3、4、5、6、7、10、11、13、16 章；古市真由美：第 15、17 章；鈴木大路郎：第 2、9 章；鈴木大路郎およびユハ・サウナワーラ：シウコサーリ大使による結びの言葉）。加えて、2016 年 9 月のシンポジウムで積極的に議論に参加して下さったすべての研究者にお礼を申し上げる。最後に、本書中の文章すべてを編集・推敲してくれた鈴木大路郎（日本語版）とラウラ・イパッティ（フィンランド語版）に個人的にお礼を申し上げる。

2018 年 9 月 26 日

札幌にて、ユハ・サウナワーラ

日本とフィンランドの出会いとつながり

—— 100年にわたる関係史 ——

目 次

はじめに……………ユハ・サウナワラ…*j*

序章 ラクスマン親子の物語 …………… オラヴィ・K・フェルト…*l*

第1部 政治的・経済的なつながり

第1章 日本によるフィンランドの独立承認、1919年5月………… 稲葉千晴…*7*

はじめに——フィンランドの独立100周年と日本—— *7*

1. 日露戦争と最初の日本・フィンランド協力 *8*

2. 第一次世界大戦と日本外交 *9*

3. パリ講和会議と日本のフィンランド独立承認の経過 *12*

4. 日本のフィンランドに対する特別な関心 *14*

5. 日本・フィンランド国交樹立と日本の対応 *17*

第2章 遠方の友——第二次世界大戦における日本とフィンランドの
外交関係とパブリックイメージ——…………… パウリ・ヘイッキラ…*22*

1. 平和から戦争へ *23*

2. 遠方の友 *26*

3. 第二次世界大戦における世界規模同盟 *30*

4. 微かだが良好な関係 *34*

第3章 フィンランド・ブランド——日本におけるフィンランドの
イメージ創造——…………… ラウラ・イパッティ…*39*

1. 「フィンランドを知ってもらおう」から国家ブランディングまで *39*

2. ムーミン一家・デザイン・イメージ政策 *41*

3. 貿易振興・自然保護・北欧諸国間の協力 *43*

4. デジタル外交・フィンたん・フィンランドブーム *46*

第4章 EUと日本の関係——失望から実現へ? —— … パート・ガンズ…55

はじめに 55

1. 類似点と高い期待 56
2. 連携の不振と失望 58
3. 変化の兆し——EUと日本間のEPA、そしてSPA—— 60
4. EU日パートナーシップは実現へ向かうのか? 63

第5章 日本・フィンランド間の貿易——自由貿易協定と企業立地——

…………… エルヤ・ケットウネン…67

はじめに 67

1. 日本・フィンランド間の貿易 69
2. 日本・フィンランド間の貿易障壁 71
3. EUと日本のFTA交渉 73
4. FTAの影響 76

第6章 成長の経路——2000年代までの日本・フィンランド間の

外国直接投資—— …………… ユハ・サヒ…81

はじめに 81

1. 1960年以降にFDIを妨げた政府規制の撤廃 82
 2. 販売および駐在活动への直接投資 84
 3. 産業活動への直接投資 87
- おわりに 90

第7章 北方開発——北海道の地域開発政策モデルとしての

フィンランドとオウル地方—— …………… ユハ・サウナワーラ…97

1. 両地域間で新たなつながりが形成された歴史的背景 98
2. オウル現象の研究 99
3. 北海道における産業クラスター構築を促進する試み 102
4. 現状 103

第8章 日本の核燃料サイクルにおけるディレンマ——フィンランドの 核ごみ最終処理場と比較して——	島本 マヤ子…108
はじめに	108
1. オンカロ最終処理プロジェクト	109
2. 最終処理場はどのように決定されたのか	110
3. フィンランド原子力協定の歴史	111
4. 原則決定、サイト選定、国会の承認	112
5. 日本ではなぜ核燃料サイクル？	114
6. 日本のエネルギー政策のコアとして	115
7. 最終処理場の選定が緊急課題	117
8. 原子力発電環境整備機構 (NUMO) の提案	118
おわりに	119

第2部 文化との出会い

第9章 日本とフィンランドの視覚芸術の社会的意義と近代国家の確立	ミカ・メルヴィオ…125
1. 江戸社会から近代国家への変容期における視覚表現の変化	126
2. フィンランドにおける視覚芸術の予期せぬ成功	132
3. 日本とフィンランドの芸術——その違いと類似性——	137
第10章 建築と超越——フィンランドと日本における ミニマリズム建築の比較——	カイサ・プロネル-パウエル…141
1. ミニマリズムの源	141
2. フィンランドにおけるミニマリズムのルーツ	142
3. 日本におけるミニマリズムのルーツ	145
4. フィンランド建築におけるミニマリズム	147
5. 日本建築におけるミニマリズム	150
6. 建築と超越	153

第11章 ヘルシンキの母と3人の日本人の息子

—— マルタ・ケラヴオリの若き友人 —— …… リトバ・ラルバ…157

はじめに 157

1. 大正時代(1912～26年)の子どもたち 162

2. 関係の構築 164

おわりに 167

第12章 日本におけるフィンランドの紹介

—— 戦後20年間の活動の内容と意義 —— …… 小川 誉子美…171

はじめに 171

1. フィンランドを紹介した人びとと著作物 171

2. 活動の対外的・国内的背景 181

第13章 親密な音色——日本におけるフィンランドのカンテレの受容——

……………チェン・イン・シェン…185

1. 日本におけるカンテレ音楽の状況 186

2. 音色へのあこがれ 189

3. 包み込むような一体感と(スピリチュアルな)自己 192

第14章 フィンランドと日本のタンゴブームから垣間見る

両国共通の歴史的・社会的背景 …… ナインドルフ 会田 真理矢…197

1. フィンランドのタンゴ 198

2. 日本のタンゴ 199

3. タンゴ人気の歴史的・社会的要因 200

4. 歌詞の重要性 202

5. 内的感情 203

6. リミナリティー——日常からの逃避—— 204

おわりに 206

第 15 章 文化的もつれの物語——日本のキリスト教幼稚園における 日本とフィンランドの出会い—— ……………	セイヤ・ヤラギン…210
1. プロテスタントの伝道——世界的な運動と各地の形式——	211
2. 日本における幼児教育	212
3. 日本におけるフィンランド人と幼児教育	214
4. 文化的・宗教的伝統	217
5. 人格教育	221
おわりに	223
第 16 章 在日フィンランド人の談話に見る言語の意義と社会参加 ……………	リーサー・マリア・リヒト…228
1. 変化する移住環境に見る在日フィンランド人	229
2. 社会参加と言語の重要性	230
3. 子どもの家庭教育言語と社会参加	234
おわりに	237
第 17 章 日本語話者とフィンランド語話者の現在と未来 ……………	リーッカ・ランシサルミ…240
1. 学校における外国語学習	241
2. 学校の外での語学力	243
3. フィンランドにおける外国語としての日本語と学習の動機付け要因	245
4. 言葉ができるのは誰？ 未来の日本語話者とフィンランド語話者	247
第 18 章 高等教育機関は「グローバルな問題」に対応する教員養成を実現できて いるか——日本とフィンランドにおける教員養成の比較調査研究—— ……………	植松 希世子・永田 忠道…256
1. 高等教育の国際化と教員養成プログラムの潮流	256
2. 奇跡の背景にあるフィンランドの教師の存在	257
3. 日本の教育とグローバルな取り組み	261
4. グローバルな指向戦略とグローバルな視点の概念	263

5. 主要な方法論としての比較事例研究	265
6. 類似の知見と異なる見解——予備調査結果——	266
7. 現在と未来との対話	
——双方の状況に対するクリティカル・リフレクション——	268
おわりに	273
日本とフィンランド	
——2019年から2119年へ—— ユッカ・シウコサーリ	273
日フィン関係とその将来	早川 治子 276
執筆者紹介	279